朝吹登水子

新潮社版

愛(あい)のむこう側(がわ)

●著者朝吹登水子(あさぶきとみこ)　●発行者佐藤亮一
●印刷所東洋印刷株式会社　●製本所
大口製本　●発行所 株式会社 新潮社
郵便番号162番 東京都新宿区矢来町71
電話 業務部東京(03)266-5111 編集部
東京(03)266-5411 振替東京 4 - 808 番
昭和52年 9 月10日発行　昭和54年 4 月30日13刷
定価 950円

©Tomiko Asabuki Printed in Japan 1977

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

愛のむこう側——目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章　幻影から醒めて……7
第二章　美しい季節……34
第三章　カルチエ・ラタン……53
第四章　パスカル……103
第五章　祖国の姿……139
第六章　戦争と生命（いのち）……163
第七章　軽井沢へ……195
第八章　パリ再び……241

愛のむこう側

第一章　幻影から醒めて

1

紗良はホテルの六階の窓ごしに往来を見下ろした。先刻から手風琴と歌声が聞えていたからである。

往来の向う側の歩道で、ねずみ色の鳥打帽をかぶった赧ら顔の男が手風琴を奏で、連れのマフラーを首に巻いた男がシャンソンを歌っていた。

――まるでルネ・クレールの映画の一場面みたいだ。紗良は窓を開け、鉄の手摺に両肘をついた。男たちは窓の開く音に顔をあげ、愛想よくにっこり笑い、手風琴の男は一段と陽気な仕草で楽器を鳴らした。

もちろん歌詞の意味は紗良にはわからなかったが、おそらくは庶民の女の恋唄とか、『自由を我等に』のような歌詞なのだろう。窓から上半身をのり出した紗良は、冷やかな空気を襟元に感じて思わずセーターのカラーを引き寄せた。束の間の解放感を味わう愉しさに、紗良は寒さも厭わなかった。

男たちは三、四曲歌った後、鳥打帽をとってお辞儀した。紗良は、「待って」と手で合図を送り、急いで部屋にひき返し、机の上のハンドバッグから小銭入れをとり出した。

左手に鳥打帽をもった歌手が、

「メルシー、マドモアゼル！」

と威勢のいい声で叫び、小銭を拾いあげた。

七階建の建物が立ち並んだパリ八区の、昼まえの屋敷街は静まりかえっていたが、それでも二つ三つの窓が開いて、小銭が投げられた。

まだ十時半だった。紗良は昼食まで何をしようかと、その無聊をもてあました。

サン・トノーレ街はもう何度も散歩したし、注文したアフタヌーン・ドレスの仮縫いは明後日の四時であった。友達もいず知人もいず、知っているただ一人の日本人は、夫を除けば、紗良の母の妹の息子、つまり紗良の従兄に当たる敬一だけだった。紗良と敬一とは幼い時から兄妹のように遊んでいたが、早熟な敬一は、中学時代からアンドレ・ジイドに傾倒して三年前からパリに留学していた。しかしその敬一も授業があり、朝から紗良とつき合っているわけにはいかなかった。

パリの十一月初旬は毎日どんよりした天気で、始終小雨が降っていた。朝、八時に眼を覚まし、重いどんすのカーテンをあけても、強い陽光がさしこむことはただの一度もなかった。白っぽい灰色の光線が漂っているだけである。

毎朝、八時四十五分に、ドアをノックする音が聞える。

それはキャフェ・オ・レとクロワッサンとを盆にのせたメイドのノックである。紗良はドアの鍵をあけ、サーモン・ピンクの部屋着のまま、薄化粧をしてテーブルに坐る。

「お早ようございます」

と朝の挨拶を交わしたきり、夫との会話はつづかない。

夫は八時の眼覚しが鳴るとすぐ起きてバスルームに行き、髭を剃り、その日着ていく背広や、ロンドンで作らせた数着のツウィードのスポーツ・ジャケットとネクタイを、丹念に選び、一分のすきもない姿で朝食につき、出勤して行く。勤め先といっても日本の企業のパリ支店ではなく、W男爵財閥が関係をもっているフランスの商社だった。その企業が何をやっているのか、紗良にはあまり興味がなかったが、W財閥が輸入している機械類の取引き先らしかった。

仕事とは男が受け持っている世界、女が介入してはいけない世界だと紗良は漠然と子供の時から教えられていた。夫がオフィスでどういう仕事をしているのか、紗良は一度もたずねたことはなかった。パリのそのフランスの会社は、良いお顧客である日本のW財閥の令息を丁重に扱い、仕事らしい仕事は与えず、ただ、一緒に昼食をしたり、雑談をしたりしているだけのようであった。夫は、イギリスの上流家庭の子弟がするように大学を出ると、新婚旅行もかねて一年の予定で世界漫遊、欧米見学、実習をすませて、東京に帰ることになっていた。東京に帰れば、W財閥系のどこかの会社に入り、そこにしばらくいれば遅かれ早かれ役員になり、よほど出来が悪くない限り社長に就任することは前もってわかっていた。W家に生れた男子は少くとも副社長の座はつねに一つ確保されていた。

夫は毎日勤務先のフランス人たちと昼食をするので、紗良はいつも一人で昼食をした。

がらんとしたホテルの食堂で、恭々しい給仕長や給仕を相手に食事をするのも億劫で、紗良はよく部屋に食事を取り寄せた。呼び鈴を押して給仕をよび、大きなメニューに一応眼を通し、注文するのだが、毎日、同じコックの作る料理には飽きがきた。もっとも、ロンドンのケンジングトン区画のトテナム・コートという立派なマンションに住んでいた時の食堂の料理は、もっと味気ないものだった。そのトテナム・コートでのただ一つの気晴らしは、ゲーリー・クーパーに似た長身の美男の給仕長の存在だけで、紗良は毎日退屈なまなざしで、すらりとした長い脚の給仕長のきどった足取りを眺めた。

パリでも、長い一日がまたもや控えていた。結婚後、読書から遠ざかってしまった紗良は、日本からは一冊の本も持って来ていなかったし、かといってフランス語の本は読めなかった。パリにも英語の本なら売ってはいたが、読んでみようという気力がなかった。パリの長い一日をもてあました。

――私は東京では毎日何をしていたのだろう？　と紗良は考えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

新婚直後の生活でも、別にこれといったことをした記憶はなかった。朝、魚屋がご用聞きに来ると、女中は平目、鯛、白魚、赤貝などと魚の名前が墨で書かれた薄い木片のつけぎれを紗良に見せに持って来た。紗良は、「今日は、平目のお煮つけ」「今日は白魚のフライにして」と命じるだけであった。一日の献立を、朝、紗良が決めるのだが、それも面倒な時は、何か考えて頂戴、と言って出掛けた。ゴルフに行ったり、テニスをしに友達の家へ遊びに行ったり、女中を供に銀座へ買物に行ったりした。年上の、女学校を出た友達からもよく電話があり、こちらからも電話をかけて帝劇で初公演するヨーロッパの舞踊家の会や、邦楽座の欧米の活動写真を観に行くのが愉しかった。結婚後は娘時代よりずっと自由に外出できるだけでも世界が拡がったようで眼を瞠った。学校に通っていた頃は、毎日制服制帽の運転手が運転するパッカードに乗り、女中か家庭教師が前の補助席に坐った。彼女たちは紗良と並んでバックシートに腰掛けることは許されなかった。紗良は宮様のように かしずかれて登校した。だから、数え年十七歳でW男爵家に嫁いだ時、若令夫人という位置は束縛ではなく、ある解放感があった。とくに、W男爵家の一族は皆アメリカやイギリスに留学した自由主義者たちであったから、嫁の行動にとやかく口をはさむことはなく、紗良は、その時代にしては破格の待遇をうけていたのであった。紗良は嫁の苦労もなく、盛大に見送られて、欧州見学の旅に立った。

ヨーロッパという別の世界に来、自分の属する階層から離れ、家族、友人、知人のいない環境の中で、彼女は初めて夫と差し向いになった。それまでの夫は、朝出掛けて夕方戻る人であり、夜は、友人たちが麻雀をしに来たり、夕食を食べに訪れたり、あるいは夫と活動写真を観に行ったり、ボクシングの試合を見物したり、ジャズを聞いたりすることで過し、紗良は夫と一対一の人間として面と向うことはほとんどなかった。三十五日間かかる欧州航路でも、数日置きには新しい国と港に着き、見物で忙しかったし、十日間のインド洋が少し退屈には感じられはしたが、それでも船で催されるデッキ・ゴルフ、運動会、ブリッジ・パーティ、活動写真、ダンス・パーティなどで、日が過ぎていった。しかし、マルセイユに上陸し、パリに一週間滞在し、やがてロンドンの高級マンションに落ちつくと、紗良は夫と自分の間に、会話らしいものが何もないことに気づきはじめた。夫はやっと二十二歳になったばかりで、彼の主な興味はロンドンの一流紳士服店で背広やスポーツ・ジャケットを作らせ、一流のゴルフ場でゴルフをし、そして、スピードの出る美しい車を持つことであった。彼は早速、友達のS男爵財閥の三男夫妻を訪ねてサビルローの一流紳士服店を紹介してもらって、背広を何着も注文した。夕食後、夫は紳士流行雑誌のページをめくり、それに飽きると、ゴルフのクラブを振ったり、パターの練習をしたりした。しゃれたスポーツ・カー、アストン・マーティンも届けら

れた。これ以上彼らに何を望むことがあったろう？
紗良の生活は、当時の日本女性たちにとって、まさに夢のように素晴らしい生活であったにちがいない。
夫と、経済的にも階層的にも同じように裕福な環境に育った紗良は、これらの奢侈も、奢侈とは写らず、それらをごく自然に受け入れた。しかし彼女は、夫との間に眼に見えない断層が、不協和音のように徐々に心の中で生じ始めていることにうすうす気がついていた。これはいつから始まったものだろうか？　パリで敬一に同伴してもらって吉井物産を訪ねた時、敬一は不機嫌な顔をしてむっつりしていた。そして、夕食後、夫が用足しに席をはずした時、敬一は言った。
「なんだい、あの態度は……。そっくり反ってパイプなどふかしているやつがいるか。照彦君が吉井物産の支店長より偉いってわけはないだろう。ただW財閥の息子だってだけじゃないか」
紗良はそのような夫の態度に気がつかなかったし、敬一がなぜそんなに憤っているのかもわからなかった。紗良は、幼い時から、父に低頭する支店長たちを見ていたから、彼らはいつもそういう態度をとる人たちだと漠然と思っていて、自分と他人との人間関係を深く考えてみたことはなかった。紗良はホテルへ行っても料亭へ行っても三越へ行っても、皆から丁重に扱われた。たしかに、照彦が偉いわけではないし、大学を出たばかりの金持のお坊っちゃんにすぎない。吉井物産の支店長に威張った態度をしたのだとしたらたしかに失礼だった、と紗良は、しゃれた背広に身をかため、パイプをくわえ、足を組んだ照彦の姿を頭に浮べた。でも紗良には、夫の態度がなぜこれほど敬一の機嫌を損じたのかわからなかった。
ロンドンにいた頃、照彦は、午前中出勤し、午後は塾に通って英語を勉強していたが、それでも一週に三度は社へ行かずにゴルフに出掛けた。紗良も、照彦の行く塾で英語を勉強することにした。その塾は、オックスフォードやケンブリッジやロンドン大学などの受験勉強をする少年たちの全寮制予備学校で男子生徒ばかりだったが、彼女は特別に個人教授を受けられるようS財閥の三男から校長に依頼してもらったのである。
一見、平穏な生活が続いた。しかし、紗良はロンドンの三ヶ月を終えて夫と共にパリの八区のホテルに居を移すと、もう毎日の無聊と、漠然とした空虚感に心が萎った。
《パリって処も大して面白い処でもない。もちろん、素晴らしい洋服はあるし、香水屋はいっぱいだし、美しいすてきな帽子をかぶったパリジェンヌは見とれるくらいだ。でも毎日毎日空は灰色で、小雨は降るし、何もすることも見ることもない》
全く退屈だった。せめて、日本の冬の明るいお日様が出てくれたら、散歩も愉しいのに、と紗良は思うのだった。小雨の中を傘をさしてあてどもなく歩いても面白くはなか

った。

毎日十一時がすぎると、ホテルのメイドがノックをする。朝食の盆を下げに来、部屋の掃除をしにくるのである。紗良は掃除のために部屋を追いたてられるので、仕方なくその間は階下のロビーにおりることにしていた。ロビーは天井の高い、一九二〇年代風の室内装飾で、ベージュと濃緑で統一され、大きなまがいの大理石柱の中間に二メートル以上もある大鏡があった。

その日、紗良は、他の客が誰もいないのを幸い、その鏡の前で歩く練習をしてみた。いつか敬一が、「きみの歩き方はダメだよ。もっと足を美しく見せるために鏡の前で研究したら？」と言ったからである。紗良は背をのばし、正面の大鏡の中の自分の足をみつめながら歩いてみた。何度もやり直した。敬一から「椅子に腰をかけて坐っている時の足の組み方が悪い」とも言われた。それで、アール・デコ風の肘附椅子に坐って、足の位置を研究した。たしかに、坐り方によって、また足の組み方によって、足はずっと美しく見えた。そんなことで時間を潰し、ロビーに置いてある雑誌をぱらぱらめくって写真だけ眺め、ホテルの玄関前をぶらぶらしてから紗良はエレベーターに乗った。

部屋のツウィン・ベッドにはベージュのサテンのベッドカバーがかけられ、化粧台の上やバスルームがきちんと片附けてあった。あと一時間半もしたらベルを押し、昼食を注文するだろう。紗良は溜息をついた。彼女はその一時間半が途方もなく長く感じられた。その時、電話のベルが鳴った。敬一からだった。

「お早よう。今日、カルチエ・ラタンで昼食をして、絵でも見ないか」

紗良は、夫にはない敬一の優しさを感じて嬉しかった。三十分後に、ジョルジュ五世のメトロの駅の前で会う約束をして、受話器を置いた。紗良はバスルームの鏡の前で髪を直し、もう一度軽くパフで鼻を叩き、鏡に向ってちょっと微笑してみた。

《カルチエ・ラタンならセーターのままでいいな》紗良の口から軽ろやかなメロディーがながれた。

紗良はロンドンで買ったキャメルコートを羽織り、ワシントン街からシャンゼリゼ通りに出た。メトロの前に敬一が見えた。

遠くから、白人たちの間で見る日本人は小麦色の顔色をしていて、暑い国から来た日に灼けた人間に見えた。

「待った？」

紗良はこれから過す半日に期待をかけ、嬉しさに声をはずませた。

「いや、いま来たところだよ。カルチエ・ラタンのバルザールで昼食をしようか？　あの界隈のインテリが行く仲々いいブラスリなんだよ」

「ブラスリ？」

「簡単に食事をするキャフェとレストランの中間みたいな

処さ」

彼らはメトロにのって、シャトレ駅でおり、セーヌ河を歩いて渡ることにした。サラ・ベルナール劇場の前の広場から、オー・シャンジュ橋を渡っている時、敬一がふと立ち止まった。

「ほら、見てご覧、きれいだろう?」

紗良は灰色の空の下の、どんよりくすんだセーヌ河を見た。近くには高等裁判所の石塔が見え、遠くにアレキサンドル橋の金色の彫刻が煌いていた。右手の大きなガラス張りの丸天井の屋根はグラン・パレだ。パリの灰色の空にはさまざまなニュアンスがあり、不動にみえるセーヌ河も相当速い流れであった。

敬一と紗良はしばらく欄干に肘をつき、向きを変えて中の島を眺めた。三角洲の岬のように尖んがった中の島の先端の樹々の下を、一組の男女が腕を組んで歩いていた。向いの左岸の河岸には、平底船が二隻、繋がれてあった。川の上を冷い風が吹いていたが、紗良は飽きることなくこの風景に見とれた。平底船はただ貨物を運ぶ船というだけでなく、人びとの住居でもある。甲板には男のパンツとランニングシャツが二枚、女のシュミーズが一枚冷風に晒されていた。

紗良は時々首をもたげては、右岸を、そして左岸の建物に眼をやった。

灰色の空の下の、灰色の石造りの建物。パリは灰色の都会だった。しかし、その灰色も、八区のホテルの窓から見る灰色とはちがっていた。歴史がこれらの灰色の石の中で生きているようだった。ノートルダム大伽藍は塔の尖端しか見えなかった。紗良はふと幼い時に見た怖い活動写真、『ノートルダムの傴僂男』を思い出した。醜い男が笞刑に遭ってあえいでいる光景は、長い間幼い紗良の夜々を苛んだ。あの傴僂男は、美しい娘を愛していたらしいが、なぜ笞刑に遭ったのか紗良にはよくわからなかった。あの活動写真でヨーロッパの中世期の暗さを初めて垣間見たのであった。

しかし、現在、一九三五年、生きた怪物たちはノートルダムから消え、石の怪物たちだけが、大伽藍の此処彼処から、上半身をのり出して、通行人たちを見下ろしているのだ。

「サント・シャペルがすぐ傍だから行ってみよう。そこの祈禱堂は、十三世紀の素晴らしいステンドグラスで宝石ってよばれているんだ。ロマン・ロランは、サント・シャペルをフランスの魂とよんでいる」

紗良は敬一と肩を並べてセーヌ河岸をしばらく歩き、高等裁判所の金色の飾りをほどこした鉄門をくぐった。

「この建物の中にあるの?」

「うん、左手にね。聖ルイ王が建てた祈禱堂なんだよ」

二人は高等裁判所の手前を左手に廻った。

紗良が、古色蒼然とした祈禱堂の扉を押すと、突然、紺

碧の夜空に星を散りばめたような穹窿の天井と、赤と金に彩られた柱が眼を射った。生れて初めてはいるゴチックの祈禱堂に、紗良はお伽の国に来たような驚きを感じた。

敬一は紗良の肘を支えながら小さな階段の入口に導いた。一人の人間がやっと通れる狭くて暗い螺旋状の石段を、二人はかすかに息をはずませながらぐるぐると登った。三十段ほどあったろうか。階段のところどころに刃物で切ったような薄い割れ目の覗き窓があった。

暗くて狭い階段を登りつめると、突然眼の前に、宝石を散りばめた御堂が出現した。瑠璃色とルビー色を主とした焼絵ガラス窓が、高い天井までびっしり昇っていた。紗良は思わず息をつめて、眼を瞠った。《なんという美しさ！ほんとうに宝石の御堂の中にいるようだ》紗良は茫然として脇の石の腰掛けに坐った。焼絵ガラス窓はキリストの物語を一つひとつ表わしていた。

紗良は、心が昂まり充たされていくのを感じた。キリスト教徒でないのに、静かに祈りたい気持が押しよせてきた。紗良はしばし眼をつぶった。眼をつぶっていても、輝く焼絵ガラス窓の存在を身に感じて、彼女は深い幸福感に包まれた。

紗良は、煌く瑠璃色とルビーの後光に長いこと打たれて、未知の、不思議な感動を覚えたのであった。

サント・シャペルの祈禱堂を出て、二人は無言のままサン・ミッシェル広場へと向った。セーヌ河にかかった橋の袂から振り返ると、ノートルダム大伽藍がそびえていた。紗良は、大伽藍のたたずまいや、セーヌ河畔の石塀の蔦を眺め、パリの美しさをはじめて知った。

中の島から左岸にかけてのパリは、八区の繁華街や十六区の屋敷街とは全く趣を異にして、一つひとつの路地や、建物に、歴史を湛えた雰囲気があった。

そして、サン・ミッシェル広場の若々しい賑いは、自分がまだ若いことを紗良に知らせてくれた。彼女は仲間を見出したように浮き浮きした。

もうそろそろ正午になろうとしていた。サン・ミッシェル広場と河岸の角にあるオー・デパールというキャフェのガラスで囲ったテラスには、昼食前のアペリチフのグラスを前にして人びとが一服していた。

本やノートを小脇に抱えた若者たちが、サン・ミッシェル大通りを往き来していた。ウェーヴの長髪をオールバックにして、うなじを剃刀で剃っている若者たちは、ロンドンの男たちの身についた気取りはなかったが、一人ひとりの顔にもっと個性が刻まれているように紗良には感じられた。

彼女は若々しい雑沓に混ってすれちがう顔を眺めた。鼻すじの通った、深いまなざしをした美しい若者に出会うと、紗良の心は、火が点されたように明るくなった。ラテン系の男たちの濃茶の瞳は美しく、北欧の人たちのまつげが白っぽくて眼の輪郭がぼやけている瞳よりも表情が豊かであった。

バルザールというブラスリは、サン・ミッシェル大通りとサン・ジャック街を結ぶ通りにあって、店の作りはいかにも十九世紀を想わせた。看板は黒地に金文字で、内部のガラス窓には、いかにもフランスのお婆さんが編んだという感じの、手編のあらいレースがかかっていた。

紗良は敬一に先立ってドアを押した。内部の客たちはいっせいに紗良を見たが、それは店に入ってくるすべての客に対するざっくばらんな視線であって、ロンドンの、外国人を見て見ぬ振りの視線ではなかった。

「お二人？」

と給仕長が言った。

敬一が馴れた口調で返事をすると、給仕長は二人を左側の作り附けの席に案内した。メニューを二人に渡し、立ち去った。紗良は敬一の説明に耳を傾けた。レー・オー・ブール・ノワールという魚料理は、赤えいの縁側にバター・ソースがかかっているものだそうで、紗良はそれに決め、前菜は何にしようかと迷ったが、ちょっと贅沢をしてフォワグラにした。

「フォワグラ二つとレー・オー・ブール・ノワール二つ」

敬一が注文をとりに来た給仕長に言う。給仕長は、フォワグラという一語に敬意を表し、

「フォワグラ二つ」

と繰り返した。

隣席の白髪の学者らしい紳士も、フォワグラという声に、ちょっと振りむき、東洋の若者たちを一瞥した。おそらく彼らをインドシナから留学に来ている金持の恋人たちとでも思ったのだろう。

紗良は、パリに来てフォワグラを食べるのは三度目だった。フランス人の珍重するトリュッフという黒い茸はさほど味があるとも思われなかったが、鷲鳥の肝臓は繊細な味だった。紗良は薄切りのトーストと一緒に、ゆっくりフォワグラを味わった。

ブラスリの中はキャフェの活気があった。至る処に鏡があって、それがプリズムのようにさまざまな顔やシルエットやぶどう酒の壜やコップを写し、そのデコールの中を、黒い上衣を着、純白の長いエプロンをきりっと腰に巻きつけた給仕たちが、忙しく立ち働いていた。

客たちは議論に熱中している男たちや、高い鼻をくっつけるようにして睦言を交わしている男女たちだった。

紗良はふと正面のカップルに眼をやった。同じ結婚指輪をはめているから夫婦なのであろう。新婚という年でもなく、おそらく結婚生活五、六年の二人が、昼食を子供いらずで楽しもうと出て来たらしい。料理を選ぶのに顔を寄せ合って仲良くメニューを一つひとつ検討している。そのたびに夫が妻の顔を覗きこむ。その夫の心遣いにこもる優しさを見ながら紗良はふと自分たち夫婦の沈黙の食事を思い出して、心の隅に疚みを感じた。

敬一の説明によるとこのブラスリは、カルチエ・ラタン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c